

Title	ムスリムの女性の物乞「フォキルニ」：物乞を生み出すバングラデシュの農村の社会的背景
Author(s)	西川, 麦子
Citation	年報人間科学. 1992, 13, p. 83-96
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6479
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ムスリムの女性の物乞「フォキルニ」

—物乞を生み出すバングラデシュの農村の社会的背景—

はじめに

バングラデシュでは、イスラム教徒の男性の物乞^①は、フォキール、女性の物乞は、モヒラ（女性）フォキール、あるいはフォキルニとよばれている。フォキールとは、もともととは神秘主義イスラムの修行者をさす用語であったが、現在は世俗の物乞にたいしてもこの単語が使われている。^②

本稿は、バングラデシュのタンガイル県モドプールウボジラ（ウボジラ県の下部単位）、バイシカユニオン（ユニオン行政村）のM村においておこなわれた実地調査にもとづく^③。バングラデシュの農村において、地域の人々から施しを受けて生活を営む「物乞」についてのべてゆく。調査地では、物乞の大多数を女性の物乞であ

るフォキルニがしめる。バングラデシュの農村において、女性の物乞が生みだされる背景を、「貧困」という問題からのみではなく、バングラデシュの女性の労働、ムスリムの世帯といった社会的側面からさぐってゆきたい。

1 調査地域と物乞

M村は、バングラデシュの首都ダッカから北西約一八〇キロメートル、バスで四時間、徒歩二〇分のところにある。一九九〇年六月現在、村全体の世帯数は六二戸、人口は三一八人である。これらは、イスラム教徒（以下ムスリムと記す）とヒンドゥー教徒（以下ヒンドゥーと記す）との二つの集落に分かれ、ムスリムは三八世帯二〇二人、ヒンドゥーは二四世帯一一六人である。物乞についての調査

西川 麦子

地域は、M村が含まれるパイシカユニオンと、それに隣接する、ピ
ッタラユニオン、ドンバリユニオン、ドバカリユニオンの四つのユ
ニオンである。調査地域の人口は、一九八一年の政府統計によると、
九九、〇九三人であり、このうち約九六%がムスリム、のこりの四
%のほとんどがヒンドゥーである。調査地域の物乞の多くはムスリ
ムであり、この論文においてあつかうのも、ムスリムの物乞につい
てである。

調査地域では、施しの慣習が地域の人々の生活に組み込まれてい
る。施しには様々な種類があるが、物乞の主な収入となるのは、施
しの曜日⁽¹⁾に渡されるパールピッカ（パールⅡ曜日、ピッカⅡ施し）
である。調査地域のすべての村では、週に一度施しの曜日決められ
ている。たとえばM村では毎週月曜日が施しの日である。施しの曜
日は、隣接する二、九つの村が同じ日であり、また施しの曜日が、
地域のなかで特定の日に集中することなく、土曜日から金曜日まで
の七日間にまんべんなく振り分けられている。物乞たちは、自分の
村から一日で往復できる範囲内の施しの曜日にあたる村々へ、モノ
ゴイにでかける。それぞれの体力や必要におうじて毎日モノゴイに
ゆく者もいれば、週の数日だけ出かける者もいる。

毎週月曜日にM村を訪れる物乞の数は、日によって四〇人から八
〇人、平均すると一回の施しの曜日に六〇人ほどの物乞がやってく
る。そのほぼ九割が女性の物乞フォキルニであり、男性の物乞、フ
ォキールの数は女性にくらべると非常に少ない。人々の話では、以
前は、フォキールの方が数が多かったが、この二〇年ほどのあいだ

にフォキルニの数が急増していったらしい。しかし、調査地におい
て、モノゴイが一つの専門的な職業として社会のなかで公認されて
いるのはフォキールにたいしてのみである。フォキールとなること
ができるのは、体が不自由になり普通の労働ができなくなった村人
に限定され、かついったんフォキールとなるとモノゴイを専業とし
なくてはならない、という社会の暗黙の決まりがある。フォキール
はそれぞれ扶養家族を抱え、日常生活においては他の村人と同じ世
俗の人間である。しかし、フォキールという職業には様々な宗教的
要素が含まれている。村人がフォキールとなるときには、モウロビ
（ムスリムの導師）や古参のフォキールから通過儀礼を受けてフォ
キールとして承認される。そしてパールピッカの他にも宗教上の特
別な施しや葬制などにおける食事の招待を受けることができる。フ
ォキールはこの社会のなかで宗教的な役割を与えられている。

ところが、フォキルニにたいしては、フォキールにみられるよう
な社会的認知のプロセスはなく、文化的意味づけがなされていない。
フォキルニとなるための条件も限定されない。フォキルニのなか
に、身体的な理由をあげてモノゴイしかできない、という者もいる
が、しかし意志と機会があれば他の仕事をするができるだろう
と思われる者がけっして少なくない。年齢層は五〇才代から七〇才
代にかたより、二〇、三〇才代の若い女性は少なく、未婚者はほと
んどいない。フォキルニたちは、モノゴイをしながら他の副業をも
ったり、モノゴイをやめて他の仕事を始めることができる。またモ
ノゴイを始めるときに、フォキールにみられるような宗教的な通過

儀礼を受ける必要はない。パールピッカ以外の宗教的な意味をもつた特別な施しは女性には与えられない。ムスリムの儀礼においても、フォキールのように食事に招待されることもない。

調査地においては伝統的には正統なフォキルニとはもともと存在しない。それでも、女性の物乞が多数生みだされてゆく。それは単に経済的な理由のみではなく、次のような社会的要素が組みあわさって、女性の物乞を生み出しやすい状況がつけられるのではないかと考えている。

a. バングラデシュの世帯が、とくに貧困層では、一人の男性とその妻子といった核家族の形態をとりやすい。また、それぞれの世帯の経済的独立性が高い。世帯内の男女の性別分業がはっきりしており、女性は経済的収入を男性に依存している。

b. aの形態のもとでは、世帯主である男性の死亡、あるいは病気は、その世帯の成員にとっては決定的な経済的打撃を与える。

c. 寡婦となった女性や、老人にたいする扶養の義務が、親族や集落において制度的には確立していない。

d. 土地なしの貧困層において、寡婦や老人、働き手を失った者を、別の世帯が吸収することができないほど親戚全体が貧しく、経済的余裕がないという状況が存在する。

e. 土地や資本がなく、教育を受けておらず、普通の女性の日常の仕事以外に特別な技術を身につけていない女性が、定期的収入をえる就労機会が、バングラデシュの農村においては非常に限定されている。

f. 一つの集落を越えた地域社会のなかに、あるいは人々の生活のなかに施しの慣習が組み込まれており、モノゴイによる収入によって生活を営むことが可能である。

こうした点について順序は異なるが、まずバングラデシュのムスリムの女性の労働の問題、次に世帯、寡婦や老人の扶養の問題について考察してゆく。

2 土地なし貧困層の女性の労働

調査地のフォキールやフォキルニたちは、住む家をもたない放浪者ではなく、村に定住している。多くの者は、自分や親戚名義の屋敷地に住んでいるが、彼らが属する世帯は、農地を所有していない。しかし、こういった状況は、物乞に限ったことではない。バングラデシュの農村では、経営耕地のない世帯が、二七・三%を占めるとい^③う。また、〇・五エーカー未満の零細地片しか所^④有しない「機能上の土地なし」とよばれる階層が占める世帯比率は五五%をこえるとい^⑤われている。

たとえば、M村の場合、六二世帯のうち、一二世帯(一七・七%)が経営耕地をもたず、この一二世帯を含めた二二世帯(三三・九%)までが、〇・五エーカー未満の土地しかもたない。調査地では、十一月から十二月にかけてアモン稲、四月から五月にかけてポロ稲の収穫があり、十二月から一月に菜種、八月から九月にかけてジュートの刈り入れがおこなわれる。自給するだけのじゅうぶんな広さの

耕地をもたない世帯では、男性は、季節のそのときどきによって、農業賃金労働者として働くほか、日曜雑貨の行商（稲の収穫期）、魚とり、竹細工、駄菓子作り、力車夫、といった様々な仕事を組み合わせて収入を得ている。

バングラデシユの農村のムスリムは、性的分業がはっきりしている。男性は妻子を扶養する義務がある。多くの世帯では、女性はおもな経済的収入を男性に依存している。また、バルダ（男女隔離）の規範によって、女性は自分の住む集落を越えてむやみに行動することを規制されている。女性は主に、家事や子供の養育、収穫の後の処理作業など屋敷地の中でできる仕事を担当する。田畑にでて働いたり、定期市へ買物へゆくムスリム女性の姿は、ほとんど見られない。貧困層の女性はそれでも、集落のなかでいくつかの仕事をみつけて家計を助けている。M村では、たとえば、村の多少裕福な家の女性の仕事の手伝い、ニワトリ、アヒル、ヤギの飼育（裕福な家のヤギを預り、そのヤギが出産すると、二匹なら一匹、一匹なら半額を得る）、ポップライスやシュリ（米菓子の一種、乾燥した季節だけ作ることができる）作り、といった内容である。

調査地の人々は、世帯のなかに働くことができる男性の稼ぎ手がいれば、土地がなくとも、いくつかの仕事を組み合わせて暮らしている。村人がモノゴイを始めるのは、男性は、身体的な障害をもつために働けなくなったときに、そして、女性は、これまで一家の稼ぎ手であった配偶者を失なった場合である。夫に扶養されることができなくなった女性が、他の世帯からの援助を受けずに生活を営む

ことは容易ではない。

住み込みの家政婦になるのでなければ、他人の家で働くといっても毎日ではなく、先方にその必要ができたときのみである。誰に仕事を依頼するかは雇い主が決めることであって、自分にその仕事はまわってくるとは限らない。女性が頼まれることが最も多い仕事は、足踏み式脱穀具（デキ）を使った精米作業である。しかし、最近、裕福な家ではバザールの脱穀機を利用するようになり、村のなかでデキを使った仕事を貧困層の女性に頼むことは以前より少なくなつた。また農作物の収穫あとの処理作業の手伝いは、一年の特定の季節にしかできない。布団を縫う仕事も、頻繁に頼まれるわけではない。そのほか、米菓子作りは、技術を学ばなければならないし、材料の購入費がある。菓子の種類によってはある季節にしか作ることができない。ニワトリやアヒルを飼うといっても、資金がいるほか、昼間は放し飼いをするのであまり多く飼いすぎると近所の者たちから苦情がでる。ヤギの飼育では、毎日の定期的収入をもたらさない。こうした女性の労働の収入の不安定さにたいし、モノゴイは、比較的安定した定期的収入を得ることができる。経済的側面からのみれば女性にとっては魅力的な収入源となる。モノゴイを始めるにあたって資本は必要としない。飢饉、洪水といった特別な状況でなければ、とにかく地道にモノゴイに歩けば毎日収入を得ることができる。また、その時々体力と必要におうじてモノゴイにでかける日数を個々人が調整することができる。施しの主なものは米である。集まる施しの量は、農業の一年のサイクルにしたがって変わってく

るが、それでも一年をとおして毎週の収入が絶えることはない。フォキル二たちの話では、一日に集まる米の量は、ベンガル暦のスラボン（七〜八月）からカルティク（十〜十一月）の四ヵ月間とファルグン（二〜三月）からチョットロ（三〜四月）の二ヵ月間は少なく、一ノ二〜一シエル（シエルⅡ一キログラム弱）、ときには三ノ八シエルほどである。収穫期を含む、ポイシヤク月（四〜五月）からアシャル（六〜七月）の三ヵ月間とオグロホヨン（十一〜十二月）からマールグ（一〜二月）の三ヵ月間は、集る施しは一日、一〜十一ノ四シエルに増える。他人の家で一日働いたとしてもそこで女性が賃金としてもらえる米の量は、一十一ノ四シエルであるから、日によってはそれと同量の米の施しを集めることができる。

バングラデシュの農村では女性が経済的収入をえる手段がないわけではないが、それによって男性に頼らず毎日食べてゆけるだけの定期的な収入をえることは難しい。貧困層の女性がモノゴイを始めるのは、しかし、こうした女性の労働手段や就労機会の問題だけではなく、バングラデシュの世帯の特徴そのものに、配偶者を失った貧困層の女性に経済的独立を強いることになる要素が含まれている。

3 バングラデシュのムスリムの世帯

バングラデシュの農村では、同じ竈から食事をとる者が、生産―消費のひとつの経済的単位に含まれる。息子が父親の世帯から独立

する際、たとえ同じ小屋に住んでいる場合でも、独立した竈を新しくつくる。以後、父と息子は別家計を営むことになる。また逆に独立した経済的単位として別々に暮らしていた父と息子の世帯が、なんらかの理由で一つの経済的単位となる場合は、別の小屋に住んでも同じ竈から食事をとるようになる。同じ竈から食事をとる者たちは、それぞれの収益を合わせ、経済的生産活動に携わらない者の扶養も含めて消費する。ただし、次のような例外がある。たとえば、裕福な家で年契約の住み込みというかたちで働く労働者、子供の家庭教師を条件としたまかないつき下宿学生、通学のために一時的に親戚の家に滞在している者など。彼らは、同じ竈から食事をとるが、一時滞在者であり、同じ世帯の成員とは考えられていない。また、高齢の寡婦が、特定の息子の世帯に属さず、複数の息子たちの各世帯から世話を受けたりする場合、その寡婦は特定の世帯に属していると判断しにくくなる。

農村では、同じ屋敷地にひとつの中庭をとりかこんで、複数の世帯の小屋が集まって住んでいることが多い。こうした屋敷地をさして、あるいはそこに集まった世帯の集合を一つの単位としてバングラデシュではバリという。一つのバリのなかの複数の世帯は、父系の親族で構成されることが多いが、一つのバリが親族関係をもたない世帯によって構成されることも可能である。また、あるバリに住んでいた者が、独立して別の屋敷地に小屋をたて、そこで新たなバリを構成してゆくこともしばしばおこる。バリに含まれる世帯の数は一〇以上のものもあれば、一世帯のみという場合もあり、バ

リの規模は一樣ではない。

一つの世帯の構成員については、バンングラデシュのムスリムの世帯では、基本的には一人の男性とその妻と子供という構成を核に、次のような世帯のサイクルをくりかえす。

(1)核家族（一人の男性とその妻と子供）

(2)複数の核家族の組み合わせ（世帯主である一人の男性の核家族と既婚の息子の核家族）

(3)核家族（娘は婚出し息子は独立したあとの夫婦）

ここで、(2)の世帯は、かたちの上では拡大家族（たとえば親と既婚の息子、複数の既婚の兄弟とその妻子）であるが、拡大家族を構成しているそれぞれの核家族が、いずれは独立することを前提とした暫定的な段階として意識されていたり、世帯が核家族に分裂するより拡大家族のままの方が経済的、社会的、政治的に利点が多いと考えられる期間のみのかたちであることが多い。世帯は、それが核家族、拡大家族、あるいは成人男性を欠いた家族のかたちであっても、消費、生産において、それぞれ一つの共同の経済的単位であり、その単位は、他の世帯からの経済的独立性が高い。複数の世帯が長期にわたって共同で生産活動にたずさわったり、耕作地を共有することは少ない。バリが父系の親族の複数世帯のみで構成されている場合であっても、それぞれの世帯が儀礼の際に協同作業を行なう単位となったり、対外的に政治的に連合することはあるが、バリ自体が一つの経済的単位となることはなく、バリのなかの各世帯は独立した経済活動を営む。

拡大家族の形態をとる世帯が核家族に分裂するときの要因について、Jansen (1987) は、それぞれの核家族が労働力や消費量に違いができた共同で生産、消費することに葛藤が生じたときであると述べ、裕福な世帯よりも貧困層のほうが拡大家族の分裂が早い時期におこることを次のように指摘している。「裕福な世帯では、大きな世帯である方が地域での威信を保てたり、世帯主が土地を分散させることを嫌うなどといった、社会的、政治的、経済的な理由から拡大家族のままであることが都合がよいことがある。一方貧しい世帯では、拡大家族でいることにさほど意味が見い出せず、裕福な世帯より早い時期に分裂しやすい。土地が全く、あるいはわずかしかなければ、息子たちは、経済的に独立し、非生産的な家族の成員を抱える重荷を避けた方が得たと感じるだろう。」

拡大家族の分裂は、息子が結婚してもとの世帯から独立するといふかたちで生じるほか、農地がない貧困層の世帯では、世帯のなかで生産を担う若者が世帯員全員を養うことが困難な場合に、稼ぎ手の核家族と、その他の世帯員のあいだにもおこりうる。Jansen, Jahangir, Maal (1983) は、極端な貧困状況の期間に、世帯から除外される対象となるのは、子供や老人、とくに女性である、と述べている。しかし、少なくとも私の調査地においては、貧困ゆえに、子供の扶養が切り捨てられる、という話は耳にしたことがない。一〇才にみたない子供が、他の家に住み込みで働くことはあっても、モノゴイをする者はいない。生活の困窮のなかで、経済的独立を迫られるのは、世帯のなかでは、子供ではなく、老人や女性、とくに、

妻としても子供を育てるという意味での母親としての役割も求められない年配の寡婦であろう。

老人の扶養については、原（一九八四）は、バングラデシュのムスリムの家族は、老人を支える家庭的基盤が弱いとして、バングラデシュのポリバル（家族・世帯）の次のような特徴をあげている。

（a）家族の共同体的意識が極めて弱い。家族はいかなる意味でも、生者とのあいだの運命共同体とはなり得ない。バングラデシュのポリバルとは、「扶養・被扶養の義務・権利で結ばれた、ある男とその妻及びその未婚の息子・娘よりなる集団である。」

（b）未婚の息子・娘の扶養は、子供の方からの反対給付を伴わない一方的な男親の義務である。一方親の扶養の義務はあいまいで、年取った親の扶養に関する制度が不安定なものであると同時に、それに関する道徳的圧力も弱い。

（c）子供の相続権は、その親の生活への貢献度と関係なく平等に行使され、結果として亡くなった親の意志があまり関係しない。それ故の、親の扶養の動機も少ない。

原が指摘するように、バングラデシュでは、年をとった親を誰が扶養するかについての義務は制度化されていない。子供たちは結婚した順に独立し、親は、最後にのこった末息子の家族とともに住むことが結果的には多くなる。また、息子たちがみな独立したあと、寡婦となった母親は、特定の息子の世帯に属さずに、その時々によって複数の息子のうちの誰かの世話になるといふことがしばしばおこる。あるいは何ヶ月かごとに、息子や婚出した娘の家に暮らすと

いうこともある。これは、父親についても同様である。

子供に相続させる財産がなく、年をとり働けなくなった老人の地位が、不安定なものになる可能性はある。しかし、親の扶養義務が制度化されていないからといって、親の扶養に関する道徳的圧力が弱いかといえ、判断が難しい。村の裕福な世帯や、裕福ではなくとも経済的に親を扶養することが可能である世帯のなかで、働けない父親や、寡婦となった母親の扶養を放棄することは、バングラデシュの村落社会においてそう簡単には考えられない。また、そのようなことが起これば社会的非難を受けることになる。村の寄り合いに、母親が、親の世話をみない息子の世帯を訴え、息子が裁かれるということもおこりうる。

世帯の構成が核家族を基本とし、各世帯の経済的独立性が高く、かつ老人、寡婦の扶養が制度的には確立していないといった特徴をもつバングラデシュの社会において、実際にはどのような世帯の女性かモノゴイをしているのか、これからフォキルニの世帯についての調査資料を検討してゆこう。

4 フォキルニとその世帯

これから示してゆく調査事例は、一九九一年二月十八日の月曜日にM村にやってきた七九名の物乞のうち、フォキルニ二六六名についてである。なおフォキルニの世帯、その世帯員の構成は、(1)他の世帯から独立した竈をもつ、(2)同じ竈から食事をとる者、という二つ

の事項を判断のよりどころとした。フォキルニのなかには、息子や兄弟の家族と同じ小屋に暮らしながら、独立した竈をもち家計を別にしてゐる者もいる。これは同居別世帯と考える。年契約で他の家に住み込みで働いている未婚の息子、娘については、フォキルニが、彼らをポリバル（家族・世帯）だといひ、彼らが他の世帯に属してゐると判断できない場合、フォキルニの世帯の一員とみなした。なお、調査をおして出会つたフォキルニは、複数の息子たちの竈から食事をとつてゐる例はみられなかつた。

フォキルニたちの居住村については、他の地域から流れてきてその村に住みついた、という例はみられない。六六名のうち六二名までが、婚家あるいは実家がある村に住み、残り四名も母の実家、あるいは娘が嫁入りした村に住んでゐる。フォキルニたちが、地縁、血縁関係からまったく無関係なところで生活をしてゐるのではない、ということがうかがえる。

六六名のフォキルニの世帯員の平均人数は、二・三〇人であり、これはたとへば、M村の平均五・一三人と比べると非常に少ないことがわかる。配偶者がいる者は、七名であり、全体の九割近くを占める五九名までが現在、配偶者をもたない。

フォキルニの世帯の構成について、本来世帯の成員を扶養する義務をもつ成人（既婚）男性の有無によつて次のように分類した。

〔A〕…世帯主である配偶者がいる（七世帯）。

〔B〕…配偶者が不在、世帯のなかに既婚男性を含まない（五〇世帯）。

〔Ba〕一人世帯（二九世帯）

〔Bb〕女性を中心とした世帯（一七世帯）

（フォキルニと、寡婦となつた母、未婚の娘、離婚した娘、孫）

〔Bc〕未婚の息子を含む世帯（四世帯）

〔C〕…配偶者は不在であるが、世帯主である既婚男性（息子、娘の夫）がゐる。（九世帯）

Aは七例、Bは五〇例、Cは九例である。配偶者がいる場合でも、高齢、盲目、病氣などの理由により、夫がフォキルニである者をしてゐることは、配偶者に経済的に依存することはできない。〔A〕、〔B〕の五七世帯ではフォキルニがその世帯にとつて非常に重要な稼ぎ手であると考えられる。とくに〔Ba〕の一人世帯、〔Bb〕の女性中心の世帯をあわせた四六世帯では、モノゴイによる収入にその世帯の生活がかかつてゐる。

フォキルニの多くの世帯は、家族を扶養することができる既婚男性を欠いてゐる。そういった世帯の女性が、自分が食べてゆくため、あるいは家族を養うためモノゴイを始めたかと考えられる。しかし、彼女たちは夫にかわつて自分を扶養してくれる可能性がある息子がいない者ばかりではない。

〔A〕、〔B〕の分類に含まれるフォキルニ五七名のうち、一九九一年二月以前の調査のなかで個人々の詳しい話を聞いている四六名について、彼女たちの息子や、バリのなかの他の世帯との関係をみてゆくと次のようになる。

N…息子が一人もいない（一一例）。

SG…婿養子となって婚出した息子がいる（六例、うち三例はS O）。

SO…結婚して別世帯をもつ息子がいる（二九例）。

SS…同世帯に未婚の息子がいる（五例、うち二例はSO）。

四六名のうち三分の二にあたる三二名のフォキルニは、結婚して独立した世帯をもつ息子（SG、SO）がいる。婿養子となって婚出した息子は、妻の村に住んでいるが、その他の既婚の息子の多くは母親と同じ村、あるいは同じバリに住んでいる。次に示すのはフォキルニが住むバリの構成についてである。

X…息子、嫁の夫、兄弟（父）の世帯を含むバリ（三三例）

Y…Xの世帯は含まないが、その他の親戚の世帯があるバリ（九

例）

Z…バリのなかに親戚の世帯がない（四例）。

配偶者を頼ることができなくなった女性が、最初に頼るのではないかと考えられるのは自分の子供や兄弟たちである（X）。全体の七割までが、そうした身近な親戚が同じバリのなかにいながら、フォキルニとは別世帯として暮らしている。

年をとってから夫を失い生活に困窮した寡婦が、同じバリに住む息子たちの世帯には吸収されず、モノゴイをして一人で暮らす。病気や高齢のため働けなくなった父の世帯を、独立した息子は世話をみず、母がフォキルニとなって生計をたてる。モノゴイをしなから育てた子供たちも、結婚すれば独立して自分の妻子を養い、母親はこれまでとおりモノゴイをして、一人で暮らす。夫を失ったあと実

家に戻り兄弟の家に住みながら、一緒に食事をするとはなく別世帯として暮らす。こうした個々の例を、もう少し具体的に示してゆく。

「A」配偶者がいる世帯

配偶者がいるフォキルニは、夫がフォキルである場合をのぞいて、ほとんどの者が、フォキルニが世帯の稼ぎ手となっている。調査で出会ったフォキルニについては、既婚の息子を含む二世代が一緒に暮らしている例はみられない。

「A」サヘラ（四五才、以下年齢はすべて調査者による推定）は、三人の息子に娘が一人いる。まだ誰も結婚していない。毎週月曜日欠かさずM村にやってくる。モノゴイにやってきたサヘラが、M村で、香辛料をすり潰すなどの小さな仕事を引き受けて、その家の女性と台所で話をしながら作業をしている姿をみかけることがある。

「夫の父親は裕福だった。夫の母親が早くに死亡したあと、夫の父は再婚した。その二度めの妻との間には五人の息子と四人の娘が生まれた。継母は（サヘラの）夫をいじめ、夫の父は、新しい妻の言いなりで、土地もすべて二度めの子供の名前で相続させた。夫が病気で仕事ができなくなり、それで（サヘラが）六年前からモノゴイをしている¹⁰」。サヘラはモノゴイの他に、バリのなかでニワトリやアヒルを飼っている。屋敷地内の竹を売ることもある。

「Ba1」一人世帯のフォキルニ

私が調査をとおして出会ったフォキルニのうち四割以上は一人の世帯である。この場合一人だというのは、独立した竈をもち、一人で食事をする、つまり独立した家計を営んでいるということであり、同じ屋根の下に住む同居人がいないとは限らない。一人世帯のフォキルニの暮らし方は、次のような三つのパターンがみられる。

「Ba1」他人のバりに住む。

「Ba2」婚家や実家のバリのなかの独立した小屋に住んでいる。

「Ba3」息子や娘の世帯と同じ小屋に住んでいるが、独立した竈をもち別世帯として暮らしている。

フォキルニの多数を占める一人世帯の者たちは、他人のバりに住んでいる者（「Ba1」）は非常に少なく、大部分が、実家や婚家のバりに住む。一人暮らしのフォキルニの七割以上は「Ba2」に該当する。彼女たちが一人暮らしなのは、身近に頼る者もなく天涯孤独の身だからではない。かつては同じ世帯の成員として暮らしていた血縁が、彼女を扶養家族の一人として受入れられない、あるいはフォキルニがそうした親戚関係のなかに暮らしながら、経済的には彼らから独立した生活を営んでいる。

「Ba1」カンチョン（七五才）の息子も娘も婚出した。「夫が死亡したあとしばらくは婚家にいた。夫は二人兄弟で〇・〇五エーカーの屋敷地があった。ところが、夫の兄弟が死亡し、自分の息子も結婚して婿養子となって家を離れた。一人で婚家にいることもで

きず、実家がある村へ戻り、他人の土地に小屋を作って住んでいる」。

「Ba2」バハトン（六〇才）は、二〇年近くモノゴイをしている。今は一人暮らしだ。「戦争のころ、夫が死亡した。その八、九日後にはモノゴイに出るようになった。当時子どもたちは幼なかった。実家に戻った。今では二人の娘は結婚し、二人の息子は土地はないが、ボルガ（刈り分け小作）をして耕している。季節には下カンドンダリ（香辛料、駄菓子、石鹸などの日用雑貨をかついで行商）をして村々をまわっている。兄は三・六エーカーの土地をもっているが世話はみてくれない。息子たちもそれぞれ別世帯をもっている。

（バハトンは）別の小屋に住んで一人で料理して食べる。」

「Ba2」アチャ（七五才）は、夫が死亡してから三〇年ほどたつが、モノゴイを始めたのは六年前からだ。三人の娘と息子一人はみな婚出した。バリには夫の兄弟の息子たちが住んでいる。「夫が死亡したあと、村人たちが助けてくれて三人の娘を嫁にやり、一人息子も婿養子となった。息子が婿にいった先は、嫁の父がまあまあ土地があつて一年に三〇〇モン（一モン＝四〇キログラム弱）もの米の収穫がある。それでも息子夫婦は母親に食事も出さないのので、怒って息子のところへは行かない。娘たちは、時々お金や服を持ってきてくれる。一緒に住もうとも言ってくるが、息子の手前もあつて今は週の数日モノゴイをして一人で暮らしている。」

「Bc3」ゲンディ（七〇才）の場合は、彼女名義の土地に娘と婿養子となった娘の夫、娘夫婦の未婚の息子が三人住み込んでいる。「三人の娘に息子が一人。夫が死亡した後、息子は長女が結婚した

ときに一緒にディナジプール県へ行ってしまった。四才だったがそれから一度も戻ってこない。ディナジプールで結婚した。次女の夫は婿養子になって自分の〇・〇五エーカーの土地に住んでいる。次女の家族と同居しているが家計は別だ。娘の夫は日雇い労働、次女は布団を縫って米をもらっている」。

「Bb」女性中心の世帯

フォキルニの世帯は、一人暮らし「Ba」について多いのが、女性を中心とした構成の世帯である。寡婦となった母、離婚して戻ってきた娘とその子供、未婚の娘、など扶養者となる夫や父を失った女性たちがともに暮らしている。「Bb」のフォキルニも、「Ba」と同じように、多くの者が既婚の息子を持ち、親戚がいるバりに住んでいる。母娘と一緒にモノゴイに歩いている例もみられる。未婚の娘はモノゴイには出かけない。フォキルニがモノゴイをして得られる収入によって家計を支えているが、娘も村のなかでできる仕事をしている場合もある。

「Bb」バネチャ（五〇才）は、モノゴイを始めて二〇年ほどになる。夫が死亡した後もずっと婚家に住んでいる。九人の子供たちは二人は死亡し、息子三人、娘四人はみな結婚した。「夫が死亡して四、五年は他人の家で仕事をしてきた。その後パン（キンマの葉）を売って村の外を出歩くことに慣れてモノゴイを始めるようになった。今でもモノゴイをしながらパンを売っている。子供たちはみな結婚した。息子夫婦も同じバりに住んでいるが彼らも自分の子供が

多く親の世話までみたらならない。離婚して戻ってきた娘と孫息子二人と暮らしている」

「Bc」未婚の息子を含む世帯

未婚の子供と住んでいるフォキルニたちも、結婚した息子がいる場合、彼らは、婿養子となって他の村に住んでいるか、独立して同じバりに母親とは別の世帯をもち互いに別家計で暮らしている。フォキルニと住んでいる未婚の息子は現在何らかの仕事をして、母親がモノゴイをしてえる収入とを合わせて暮らしている。その息子たちも結婚したあと、これまでとおり母親と一緒に暮らすかどうかは疑問である。

「Bc」アミロン（六〇才）は、兄弟のバりに住みそこに自分名義の〇・〇四エーカーの屋敷地をもつ。子供五人のうち息子二人と娘二人は結婚した。末の息子と暮らしている。「二〇年ほど前、夫は夕方道路のそばのビル（窪地）に魚をとりに行って死亡した。原因はわからない。そのころは子供たちも幼かった。子供たちを育てるためモノゴイを始めた。今は同居している末の息子以外はみな結婚して独立した。一緒に住んでいる息子はポシヨルカムラ（年契約の労働者）として働いている」。

「C」配偶者以外の既婚男性を含む世帯

フォキルニの世帯のうち、世帯主である既婚男性が主な稼ぎ手となっているのは「C」の世帯だけである。既婚男性とは、既婚の息

子、娘の夫、父親、兄弟などが考えられる。しかし、現在実家の父親の世帯で暮らしている者は、調査で出会ったフォキル二のなかでは、一名のみである。フォキル二の年齢層が高く、たいいていの父親は死亡している。また、兄弟と同居している者はいるが、同じ世帯として暮らしている者には一名も出会わなかった。フォキル二の世帯が配偶者以外の既婚男性を含む場合は、既婚の息子、娘の夫という例がほとんどである。両親から一度独立した息子が、父親が死亡し寡婦となった母親をひきとつたというかたちではなく、未婚の子供と暮らしていたフォキル二(上述したBb、Bcのパターン)が、息子や娘が結婚したあともそのまま同じ世帯にとどまり生活を続けている。既婚息子はたいいてい末の息子であり、娘夫婦と暮らしているフォキル二は、娘の夫が婿養子となって婿入りしてきた例が多い。いずれにせよ、一世帯に複数の既婚男性が含まれる例はない。

〔C〕ロミチャ(六〇才)は、「結婚して五年後離婚され、一人息子を連れて実家に戻った。実家では〇・〇五エーカーの土地をもらった。今でも結婚した息子夫婦と二人の孫とともに実家に住んでいる。息子は日雇い労働をしている」。

〔C〕ポチロン(五〇才)は、二〇年ほど前に夫を亡くした。夫が残した〇・二エーカーの屋敷地に住んでいる。子供は娘が一人いるだけである。「夫が死亡して四ヶ月は人の家で働いていたが病気になる仕事ができなくなった。それからモノゴイをしている。一人娘は、結婚して婿養子をもらった。娘は病気をした後足が不自由になり、充分な仕事ができない。孫三人と娘夫婦との六人が一緒に住

んでいる」。

以上みてきたように、フォキル二の世帯について問題となるのは、一つの世帯が男性世帯主を失った(あるいは世帯主が経済的活動を営むことができなくなった)場合である。フォキル二の世帯の構成の多くは、次のような状況を抱えている。

(1)世帯主を失った時点で、世帯のなかに新たな世帯主となり経済的に非生産的な世帯員を扶養してゆくことができる成人した男性がない。

(2)(1)のような状況において被扶養者たちはいずれも、他の世帯に編入されるのではなく、もとの独立した世帯のまままで生活している。あるいは、別々の世帯のなかの扶養者を失った者どうしがくみあわさって一つの世帯となる(寡婦と離婚、未婚の娘)

(3)そうした既婚男性を含まない世帯の未成年者が成人したあとには、結婚した順にもとの世帯から独立して新たな世帯を形成してゆく。

経済的収入をもたらす成人男性がいらないという世帯において、フォキル二たちはモノゴイを生業として暮らしている。こうした世帯が生じるのは、寡婦の息子や親戚などの世帯に、寡婦やその子供たちを吸収できるほどの経済的余裕がないことが最も大きな理由であろう。しかし、それだけではなく、核家族化の傾向があり、世帯の経済的独立性が高く、寡婦や老人の扶養が制度的に確立していない、といったパンングラデシユのムスリムの世帯、とくに貧困層の世帯に

おいてみられる特徴が、女性の物乞を生み出しやすい状況をつくりだしているのではないかと考えられる。

フォキルニの世帯では同じバリに住む息子が、一人暮らしの母親を自分の世帯に引き取らない、という例が多数みられる。配偶者を失い経済的な独立を強いられた女性が、しかし、実家や婚家のバリに住むことも拒否されることは非常にまれである。フォキルニの息子や親戚は、普段の生活において家計は別になっているが、フォキルニにたいして臨時的な援助をおこなっている。フォキルニが自分が住む小屋をたてるなど、息子たちは多少の材料や労力を提供している。フォキルニが病気にかかりモノゴイができなくなったときには、息子やバリのなかの親戚が世話をするようになるだろう。収入がなくなったフォキルニが餓死したという話は聞いたことがない。

フォキルニたちは、バリのなかの他の世帯がそうであるように経済的独立を強要されたのであって、家族や親戚の關係から排除されたのではない。息子たちは、母親を見離したのではなく、そこには息子（あるいは親戚）たちのぎりぎりの計算が働いているのではないだろうか。母親を自分の世帯員として受け入れれば、彼女は被扶養者となる。母親が常時自分で収入をえなくても食べさせなければならぬ。しかし、その母親が、自分で食べてゆかなければならぬという状況に追いやられれば、どんな苦勞をしてでも生活手段をみつめるだろう。息子の世帯の生活自体が、それ以上に世帯員を増やすことが難しいほど貧しければ、自分の世帯の生活を切り詰める

よりは、後者の選択をする者もいるだろう。しかし、それは、母親がどれほど苦しい思いをし最低限の収入しか得られなくとも、独立した経済活動を営み、それによって生活してゆくことが可能であるという判断にもついているのではないかと思う。フォキルニたちは、実際に、モノゴイによる収入によって日々の生活を営んでいる。そしてそれを可能にしているのは、世帯、バリ、集落のなかの人間關係をこえて、地域のなかに組み込まれている施しの慣習によってである。

バングラデシュの農村において、女性がモノゴイを始めるのは、単に貧困という問題によるのではなく、さまざまな社会的要素がくみあわさっている。本稿では、とくに女性の労働、世帯の問題に焦点をあてて論じてきた。バングラデシュの村落社会における、物乞の実際の活動、施しの慣習についての具体的な記述、フォキルニ、フォキルニの社会的文化的な位置づけ、といった問題については、改めて論じてゆきたい。

注

- (1) この論文では、「物乞」は人を、「モノゴイ」は行為あるいは職業を示している。
- (2) フォキールとは、アラビア語のファキール (faqir) という単語であり、これがベンガル語ではフォキールと発音されている。
- (3) 調査は、一九八八年十二月から一九九一年二月にかけてのべ一年五カ月にわたっておこなわれた。
- (4) Bangladesh Population Census 1981

- (5) 藤田、一九八八
- (6) 藤田、一九九〇
- (7) Jansen, 1987; Jansen, Jahangir, Maal, 1983; Cain, 1979; 原、一九八六
九、一九七八、一九八四、一九八六
- (8) Cain, 1979
- (9) Jansen, Jahangir, Maal, 1983
- (10) 「」のなかの文章はフォキルニたちへのインタビューをもとに、その内容を記した。彼女たちの語った言葉そのままではない。

* 本研究は、トヨタ財団一九八七年度研究助成を受けて始められた。
シンジロ・シムラは、JISARD (Japan-Bangladesh Joint Study Project on the Strategy of Agricultural and Development in Bangladesh) のプロジェクトの関係者の方々に様々なかたちでお世話になった。感謝の意を記した。

参考文献

- Bangladesh Bureau of Statistics 1985, *Bangladesh Population Census 1981: Community Tables of All Thanas of Tangail District, Tangail Sub-Division*, Government of the Peoples's Republic of Bangladesh
- Cain, Mead T. 1978, "The Household Life Cycle and Economic Mobility in Rural Bangladesh," *Population and Development Review* Vol. 4, No. 3, pp. 421-438
- 原田彦彦 1969, 「東パキスタン・チッタゴン地区モスLEM村落におけるparibar」『氏族学研究』34-3, pp. 252-273
- 1978, 「二つの家族・世帯概念——イスラム教徒の諸事例」『アシア・アフリカ言語文化研究』15, pp. 1-14
- 1984, 「バンングラデシュの老人問題——文化人類学的考察——」『日本文化と老年時代』pp. 185-231, 中央法規出版
- 1986, 「東ベンガル地方のイスラム教徒の家族」『家族の文化誌』pp. 51-78, 弘文堂

藤田幸一 1988, 「バンングラデシュの農村における雇用問題——農業技術文化の雇用吸収効果を中心として——」『農業総合研究』Vol. 27, pp. 2-23

—— 1990, 「バンングラデシュにおける土地なし貧困層への金融——ナリマン銀行をめぐって——」『アジアン経済』Vol. 31, No. 6-7, pp. 143-160

Jansen, Eirik G. 1987, *Rural Bangladesh: Competition for Scarce Resources*
Dhaka: University Press Limited

Jansen, Eirik G., Jahangir, B.K. & Maal, Bodi 1983, "Dilemmas Involved in Defining and Delimiting Household Units in Rural Surveys in Bangladesh," *The Journal of Social Studies*, No. 21, pp. 92-105